

## 研究もできる経営者を目指す

私は、社会課題を解決できる看護師になりたい。新聞記者の父の影響を受け、幼少のころより社会問題に興味があった。さまざまな社会問題を解決するため、研究や経営に携わりたいと考えている。

私は、学生時代の病院見学や実習で、精神疾患と身体疾患を併せ持った人が治療を受けられる現場がないことを知った。そのような人がケアを受けている最先端の現場、かつ新卒で受け入れてくれる現場を探した。地元を出て働きたいと思っていたが、市立札幌病院の精神医療センターが該当したため入職した。

勤務の傍らで大学院入試のための勉強を始めたころ、学生時代からの友人である樋口朝霞氏の紹介で、医療ガバナンス研究所を訪ねた。研究室には、実務をしながら研究をしている人が多く、そのキャリアに魅力を感じたため上京を即決した。医療ガバナンス研究所では、現場での経験から生じた疑問をもとに社会の情勢を調べ、指導を受けながら文章を書き、メディアを通して問題提起をしている。また、谷本哲也医師が主催している勉強会に参加し、英語の論文を読んでレターを書く指導を受けており、今年6月には『ランセット』にレターが受理された。実務においては、臨床経験から感じた過度な管理による弊害を減らしたいと考え、訪問看護に転向した。日々、見たことのない疾患の勉強をしながら、先輩のスキルをまねて、1人ひとりの利用者に向き合っている。3年間の臨床経験で、毎日数時間勉強しながら働いていたが、それでも経験は足りない。地道な積み重ねをしている日々だ。

私は、病院で自然な経過や自然な最期が許されないことに違和感を持った。認知症によって治療の必要性や内容を理解することが難しく、医療的介入への拒否を示している人に対し、拘束などの管理をして治療をすることが幸せなのか、長らく疑問であった。たとえ認知症があっても、拒否を示すことは本人の意思表示なのではないか、それに対して、他者が強制的に管理をする権利はないか、と私は考える。

看護師・保健師

坂本 諒氏



臨床経験を通して、たとえ認知症があっても、最期まで穏やかに過ごせる施設や高齢者住宅があれば強く思った。20歳代のうちに起業し、そのような施設や高齢者住宅を経営したいと思った。書籍を読み込む中で、過剰な医療を行わなければ、過度な管理をせずに最期まで過ごせる事実を知った。偶然、研究室の勉強会で、それを具現化している高齢者住宅の経営者に会った。経営者の理念に感動し、研究という側面がかかわりながら医療や福祉への姿勢を学びたかったが、それは実現はできなかった。

ただ課題もニーズも現場にある。認知症があっても穏やかに過ごしている事例に多くかかわること、事例を症例報告として発信すること、症例数を重ねて研究することなど、現時点でできることはたくさんある。またビジネスマインドを学ぶために、企業で働きながら経営の勉強をする。そう決めた。

現在私は、経営について学ぶために株式会社AIメディカルサービスに勤務している。CEOの多田智裕医師は、クリニックの開業医として働きながら臨床研究だけではなく、医療におけるAI活用のニーズをいち早くとらえて株式会社を設立した。人生における各段階で挑戦をする姿を見習いたい。加えて、多田先生の会社で出会った経営者の下で、子会社の経営を経験できるよう交渉している。

私は、足場を複数持ちながら社会課題やニーズをとらえて研究するとともに、将来的には、個人の尊厳が尊重されるケアの場を作れるよう、社会課題解決のための経営にも携わりたいと考えている。そのために、1つひとつの経験をものにしていきたい。